

# 伯父彌太と母と私(抜粋) 野村土佐夫



▲府内小学校の校庭にて(府内第五尋常小学校訓導兼校長)彌太(41歳頃)の左隣が妻の由(よし)、由が抱えているのが、四女の泰子。彌太の右前に座っているのが三女の環子(ようこ)。



▶着物姿から、兵役前の岡本彌太(左)と言われている

## 伯父との接点

昭和 14年、校長兼任で府内小学校へ転任した伯父の学校は複々式学級で1・2・3年生、4・5・6年生の2学級で、従妹の環子3年生、泰子は1年生だったと記憶しています。

私が5年生の頃で、伯父の学校に遊びに行った時のことです。この当時、私の通っていた高知市立第三小学校(現追手前小学校)は、千人余りの生徒数だったから、府内小学校の複々式教室が非常に珍しく興味深く感じたことでした。

伯父は「高知の学校に比べたら小さいろがや」と言っていました。この小さな小学校は、教師から生徒父兄間の連携は親密で、伯父にしても先生という特殊な雰囲気を持たず、市内の学校の教職員と比べ、親しみ易そうな雰囲気がありました。

戦時中の殺伐とした雰囲気は微塵も感じられ



ず、その和やかさに憧れたことです。

校庭には、大きな柳があつて、枝から長い縄の「ブランコ」がぶら下がっていて、乗ってみますと、振幅の大きさに船酔い状態になり、飛び降りたことです。

教室の裏には、川石で積み上げた5メートルほどの畠があつて、その石垣に可愛い黒い紋々のあるカラフルな卵がありました。私は珍しくて、その卵を掌に乗せて伯父に見せると、「高知にはこんなものは見れんわのう」と笑いながら、

「卵は巢にもどしちよきよ。親鳥が悲しんで泣き騒ぐき」と、優しく諭されました。

夜になって物部川へ延縄(はえなわ)を仕掛けに行くとかで

「おまえも一緒に来るかよ、少々暗いぞ」

私は、暗くて急な下り坂の杣道(そまみち)が怖くてもじもじしている。

「朝にするか、それとも暗い内に延縄を上げに行くが、よう起きるかや」

「暗いろうねえ」

「そりあ、真つ暗よ。アセチレンランプを持って行くきに、それほどもないぞ」

伯父の家から5分ばかりの河原まで、薄気味の悪い杣道を思うと即答できなかったのです。

「やっぱり朝にするか」

伯父は、生徒や父兄と共に谷間の間に消え

て行きました。

屋外が薄明るくなり、人声に飛び起きました。伯父が笑いながら、

「おまえが、ぐつすり寝ちよったきに、起こすのが可哀そうじゃった。台所の魚籠に魚が入っちゃうき見てみいや」

台所脇の魚籠には、イダヤやウナギや蟹も入っていました。

## 最初で最後

或る日曜日のこと、伯母と伯父に母と私の4人で、帯屋町の日曜市に出かけました。街中を歩

## 妹へ

このころの私は、伯父が著名な詩人とは知らず、もちろん、詩について何の興味もなかったのです。

私が伯父の詩を読み始めたのは、先に述べた

ように、中学3年の頃で、難しい詩風は思春期向きではありませんでしたが、ただ『妹へ』の幾編は、なんとか理解できたように思っています。「妹へ」の詩は、兄としての情愛が、中学生の私に薄々理解できたものです。この詩が、私にとって詩作の原点なのであります。

(野村土佐夫さんは、伯父彌太の影響で商売の傍ら数々の詩や小説を執筆し投稿。幾度も受賞しました。伯父である岡本彌太との「生きた記憶」として語られたものは数少なく、詩人としてはなく、人間「岡本彌太」を知る貴重な資料でもあります。現在執筆中のこの記録は、近い将来に刊行される予定です)



▲昭和23年(没後6年)、生地香南市岸本に建てられた詩碑。高村光太郎の筆の跡が刻まれている。

## 白牡丹図

白牡丹の花を  
掲げるもの  
剣を差して急ぐもの

日の光蒼く果てなく  
このみちを  
たれもかへらぬ

昭和17年(1942年)12月2日、岡本彌太が肺結核のため44歳でこの世を去った6年後、その偉業を称えて建設された白牡丹図の詩碑。毎年命日に、「白牡丹祭」として彌太をしのぶ行事が行われています。

没後60年から始まった「岡本彌太文学賞」。香南市の小中学生が、詩や俳句・短歌で心の中を言葉で表現することの楽しさを知り、知識を広げることが目的として詩や短歌、俳句などが募集されています。優秀作品の表彰式もここで行われてきました。18回続いたこの行事も現在は弁天座に場所を変え、盛況のうちに行われています。

次回の特集(11月号)では、「白牡丹祭」一般向けとして行われ始めた「岡本彌太・詩賞」を追ってみたいと思います。